

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

シューベルト 《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》 の構想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 千尋, Murata, Chihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1438

シューベルト《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》 の構想

村 田 千 尋

シューベルト《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》の構想

村田 千尋

はじめに ―シューベルトにとっての《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》―

フランツ・ペーター・シューベルト Franz Peter Schubert (1797-1828) は1827年夏、しばしば寝食を共にした親友エドゥアルト・フォン・バウエルンフェルト Eduard von Bauernfeld (1802-90)^{*1}との散歩の途中で、「でも僕は! 哀れな楽師の僕はいったいどうなるのだろう? 僕は年を取って、ゲーテの豎琴弾きのように戸口に忍び寄り、パンを恵んで貰わなければならないだろう! (Deutsch 1957: 270)」と述べたという。人生についても、芸術活動についても明るい将来を語る友人に対して、自分の将来への不安を口にしたものと思われるが、この頃シューベルトは既に作品80までを出版し、その中にはピアノ・ソナタ G-dur op.78 D894や弦楽四重奏曲 a-moll op.29 D804も含まれていた^{*2}。弦楽四重奏曲 a-moll については、1824年3月14日に公開初演も果たしており、健康には不安を抱えていたものの、シューベルト自身の音楽活動も軌道に乗りつつあったと考えることができる。そのような状況であってもなお、漠然とした不安を抱えていたということであろう。

さて、この発言にでてくる「ゲーテの豎琴弾き Goethes Harfner」とはヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) が1795年から96年にかけて出版した小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代 Wilhelm Meisters Lehrjahre』の主要な登場人物の一人、豎琴弾きの老人を指しており、「戸口に忍び寄り an die Türen schleichen」も「パン Brot」も彼が歌う歌詞で用いられている言葉である。自分の将来を語る時に思わず口を突いて出てくる言葉ということは、シューベルトにとってそれだけ気になる歌詞であったと言えることができるだろう。

*1 1827年、バウエルンフェルトは官吏に採用されると同時に、劇作家としての道を歩み始めていた。そして、彼の台本によってシューベルトがオペラ《グライヒェン伯爵 Der Graf von Gleichen》(D918未完)を書き始めたのもこの年の6月のことである。なお、シューベルト研究の泰斗オットー・エーリヒ・ドイチュ Otto Erich Deutsch(1883-1967) はバウエルンフェルトの生年を1813年としているが (Deutsch 1957: 8)、1802年の間違いである (<https://www.deutsche-biographie.de/sfz2282.html>)。

*2 フリードリヒ・ブルーメ Friedrich Blume(1893-1975) が『MGG』(旧版)の「古典主義 Klassik」と「ロマン主義 Romantik」の項目でも指摘するとおり (Blume 1958: 1068-70; Blume 1963: 819)、冒頭楽章にソナタ形式を用いる多楽章ソナタは19世紀において器楽の中心的なジャンルであった。交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタはルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven(1770-1827) が得意とするジャンルであり、シューベルトはその影響力の大きさ故に、一時的にこれらのジャンルに手が出せない状態にも陥ったが (村田2004: 108)、1824年以降、積極的な創作・出版活動を行っている (村田2004: 76, 94)。

シューベルトにとってゲーテはリート68曲、ジングシュピール1曲、重唱6曲の源泉となった第1詩人であった(村田1997: 102, 110)。シューベルトがゲーテの詩にどれだけ真剣に取り組んでいたかということは、作曲数が多いということばかりでなく、改訂・改作が極めて多いという点にも表れている(村田2013: 42)。

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は1815年から26年まで、長きに亘って扱った歌詞群であり、中でも〈ミニョンの歌：ただ憧れを知る人だけがLied der Mignon: Nur wer die Sehnsucht kennt〉は6回の改作を重ねており(村田2013: 48)、シューベルトにとって特に気になる詩であった。彼は『ヴィルヘルム・マイスター』より竖琴弾きの歌Gesänge des Harfners aus 'Wilhelm Meister' op.12 D478と『ヴィルヘルム・マイスター』からの歌Gesänge aus 'Wilhelm Meister' op.62 D877という2つの歌曲集に分けて出版しているが、はたして、2つの曲集とすることが、彼の本意であったのだろうか。そして、生前未出版のまま残されている曲については、どう考えれば良いのだろうか。

本稿では、創作経緯を詳らかにすることによって彼がこれら一連の詩に対して持っていた想いを明らかにすることを課題とする。

1. 小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の誕生

1-1 小説

まず、原詩の誕生について概観しておこう。

ゲーテは1795年から96年にかけて、小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』をベルリンのウンガー社 Johann Friedrich Unger から出版した^{*3}。この小説は当時大人気であり、後述するように、シューベルトも愛読していたと考えられる。

この小説は教養小説の先駆けであると同時に、15編の挿入歌(断片的な挿入も含む)が配置され、以降、多くの作曲家が歌詞として利用したという点について、歌曲史においても意義深い。挿入歌の大多数は、ゲーテが既に作っていた詩から選び、小説内のふさわしい箇所に配置したものである。「表1：『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』挿入歌一覧」を参照されたい。

1-2 付録楽譜

ゲーテ自身、これらの詩を気に入っていたのであろう。劇ではなくとも実際に歌うことを想定していたと考えられ、ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト Johann Friedrich Reichardt (1752-1814) に作曲を依頼して、その楽譜を付録として小説中の当該頁に挟み込んでいる。管見では、これがドイツ語圏における小説への楽譜挿入の最も早い例と思われる^{*4}。

*3 小説は4部8巻構成であり、1795年に第3部第6巻まで(I-III=von erstes bis sechstes Buch)が発行され、翌96年に第4部第7・8巻(IV=siebentes und achtes Buch)が発行された。

*4 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の15年後に出版されたアヒム・フォン・アルニム Achim von Arnim (1781-1831) の『ドローレス伯爵夫人の物語 Geschichte der Gräfin Dolores』(1810)にも付録楽譜8曲が掲載されており、その内4曲がライヒャルトによる。

ここで不思議なことが起こった。小説の主要な登場人物の中で、ヴィルヘルム Wilhelm の歌はいずれも断片であるため楽譜掲載の対象とならないとしても、他の主要登場人物、竖琴弾き Harfner 4 編、ミニョン Mignon 3 編、二人の二重唱 1 編の詩が載せられているにも拘わらず、竖琴弾き 3 編、ミニョン 2 編と二重唱にのみ楽譜が掲載され、竖琴弾き、ミニョンそれぞれ 1 編については楽譜が掲載されていないのである^{*5}。これは一体どうしたことだろうか。

表 1：『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』挿入歌一覧

歌詞冒頭(小説の巻章)	歌い手	ゲーテ詩集	付録楽譜
Allein das Lebensmaß (1,7)	Wilhelm	—	×
Was hör ich draußen vor dem Tor, (2,11)	Harfner	WA I 162 (Der Sänger)	◎
Wer nie sein Brot mit Tränen aß, (2,13)	Harfner	WA II 118	◎
Wer sich der Einsamkeit ergibt, (2,13)	Harfner	WA II 116	◎
Kennst du das Land, (3,1)	Mignon	WA I 161 (Italien)	◎
Ich armer Teufel, Herr Baron, (3,9)	俗謡	—	×
Ihm färbt der Morgensonne Licht (4,1)	Wilhelm	—	×
Nur wer die Sehnsucht kennt, (4,11)	M. + H.	WA II 114 (Sehnsucht)	◎
Singet nicht in Trauertönen (5,10)	Philine	WA II 119	◎
An die Türen will ich schleichen, (5,14)	Harfner	WA II 117	×
Heiß mich nicht reden, (5,16)	Mignon	WA II 113	◎
Ich hatt ihn einzig mir erkoren; (6,-)	—	—	×
So laßt mich scheinen, bis ich werde; (7,2)	Mignon	WA II 115	×
Erstling der Jugend in unserm Kreise, (8,8)	Chor	—	×
O, ihr werdet Wunder sehn! (8,10)	Friedrich	—	×

これには、1795年にゲーテとライヒャルトの間に勃発した「クセーニエン論争」が関係している^{*6}。ゲーテとライヒャルトは、それまで信頼し合い、協力し合っていた関係であったが、同論争によって不仲となり、協力関係が途中で破綻してしまった。論争勃発前、1795年前半に出版された小説第 2 部までは順調に楽譜も掲載されたが、勃発後の第 3 部には欠番が生じ^{*7}、翌年の第 4 部には楽譜掲載がなかった。その結果、主要登場人物の歌 2 曲が掲載されなかった

*5 これ以外に端役ではあるが歌姫フィリーネの歌にも楽譜が掲載されている。

*6 ゲーテが匿名で「ドイツ移民の会話集 Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten」[Bielefeld-Digitale Sammlungen]をフリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller(1759-1805)が主宰する雑誌『ホーラたち Die Horen』に掲載したところ、ライヒャルトがゲーテの著作と知らずにそれを非難したことがゲーテの逆鱗に触れ、1796年にライヒャルトとゲーテ、シラーの間で激しい論争が巻き起こった。ライヒャルトはそれまで、ゲーテが最も信頼する音楽家であったので『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』への楽譜掲載も依頼したのだが、この論争のあおりを食って中断してしまったのであろう。ゲーテ、シラーはシラーが主宰する雑誌『詩神年鑑 Musenalmanach』1797年版(1796)[books google]に風刺詩 'Xenien' を掲載し、全 925 編中 76 編においてあからさまにライヒャルトを皮肉った。この論争は、1801年 1 月 25 日にライヒャルトが病気のゲーテに見舞いの手紙を送ったことによってようやく和解に達したとされている(滝藤 2017: 46-48, 50-51)。しかし、ライヒャルトは二人と疎遠になっている間も彼等の詩に作曲し発表することは続けており、一日も早い復縁を望んでいたものと思われる。クセーニエン論争については機会を改めて論じたいと思う。

*7 論争中に出版された第 3 部に掲載された 2 曲については、既に彫版が済み、印刷の準備が整っていたため、掲載されたのだと推測できる。

のであろう。

ライヒャルトは掲載されなかった主要2曲の内、〈ミニョンの最後の歌：このままの姿でいさせて下さい Mignons letzter Gesang: So laßt mich scheinen〉(第7巻第2章、以下7,2と略記)を自ら主宰する政治雑誌『ドイツ Deutschland』第Ⅲ巻(1796, Unger)347頁にクセーニエン論争のまっただ中であるにも拘わらず掲載した。ここまでの準備をしていたということであろう。また、このことからライヒャルトは必ずしも掲載順に作曲していったのではないということが分かる。

もう一曲の〈竖琴弾きの最後の歌：戸口に忍び寄って Letztes Lied des Harfenspielers: An die Türen will ich schleichen〉(5,14)は1809年の《ゲーテ歌曲集 Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen》第2巻(Nr.101, S.59)に始めて掲載された。つまり、1795年には作曲しておらず、1809年になってようやく作曲したのであろうと推定される。

1-3 『ゲーテ詩集』

さて、ゲーテは1815年から19年にかけて、コッタ社から『ゲーテ作品集 Goethe's Werke』(以下、コッタ1815年版と略記)を出すにあたって、小説挿入歌9編(竖琴弾き4編、ミニョン3編、二重唱1編、フィリーネ1編)を自らの詩集に収録した。これには前史がある。

ゲーテはまず1806年から10年にかけて同じくコッタ社から作品集『ゲーテ作品集 Goethe's Werke』(以下、コッタ1806年版と略記)を出し、第1巻を詩集に充てた。そして、219頁に〈歌人 Der Sänger: Was hör ich draußen vor dem Tor〉を収録しているのであるが、小説挿入歌から選ばれたのはこの詩だけであった。しかし、第2巻に『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』全編を収めている。

1815年に『ゲーテ作品集』(コッタ1815年版)を再編集するにあたって、第1巻、第2巻を詩集に充て、小説挿入歌は第1巻に2編、第Ⅱ巻に7編が掲載されることになった。その際、ミニョンと竖琴弾きから1編ずつが第1巻に収められ、ミニョン2編、竖琴弾き3編、二重唱は小説とは順序を入れ替えられて第2巻に収録されている。そして全体の最後にフィリーネの歌が配置された。ゲーテがなぜ2編だけ第1巻に収めたのか、なぜ小説とは順序を入れ替えたのか、その理由は分からない。詩集における各詩の配列は「表2：『ゲーテ詩集』における小説挿入歌の配列順」の通りである。なお、現在においても、『ゲーテ詩集』はコッタ1815年版の順番が基準となっている。

表2：『ゲーテ詩集』における小説挿入歌の配列順

巻	頁	歌詞冒頭	詩集題名	小説巻章
I	163	Kennst du das Land	Mignon	(3,1)
I	164	Was hör ich draußen vor dem Tor	Der Sänger	(2,11)
II	111	Heiß mich nicht reden, hieß mich schweigen	Mignon	(5,16)
II	112	Nur wer die Sehnsucht kennt	Mignon	(4,11)

II	113	So laßt mich scheinen, bis ich werde	Mignon	(8,2)
II	114	Wer sich der Einsamkeit ergibt	Harfner	(2,13)
II	115	An die Türen will ich schleichen	Harfner	(5,14)
II	116	Wer nie sein Brot mit Tränen aß	Harfner	(2,13)
II	117	Singet nicht in Trauertönen	Filine	(5,10)

2. 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』への作曲：概観

先にも述べたように『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の挿入歌は、非常に多くの作曲家に靈感を与えてきた。The LiederNet Archive (<http://www.lieder.net/>) および IMSLP (<https://imslp.org/wiki/IMSLP>) によって現在までの作曲状況を調べると、およそ120名によって少なくとも270曲（2021年8月31日現在）が作られている。

本稿では、シューベルトに影響を与えた可能性があるライヒャルト、カール・フリードリヒ・ツェルター Karl Friedrich Zelter (1758-1832)、ヨハン・ルードルフ・ツムシュテーク Johann Rudolf Zumsteeg (1760-1802)、ベートーヴェンの4名と、シューベルト以降の重要なリート作曲家2名、すなわちローベルト・シューマン Robert Schumann (1810-56) とフーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) の創作を概観しておこう。

2-1 ライヒャルト Johann Friedrich Reichardt (1752-1814)

前述のように、ライヒャルトは小説の付録 Beilage am Goethes "Wilhelm Meister" (1795) として7曲を作曲し、ほぼ同じ時期にミニヨンの残る1編にも作曲していた。その後1806年に〈ただ憧れを知る人だけが Nur wer die Sehnsucht kennt〉の独唱ヴァージョンを楽譜集《トゥールバドゥール Troubadour》に掲載し、1809年に《ゲーテ歌曲集》を出版するに当たって最後に残った〈竖琴弾きの最後の歌〉を作り足し、9編全て（計10曲）の作曲を終えている。

表3：ライヒャルト《ゲーテ歌曲集》(1809)における曲順

II Nr.92	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt) 4,11	初出 Troubadour S.77 (1806)
	Gesänge aus Wilhelm Meister's Lehrjahre (II S.52-59 Nr.93-101)	
II Nr.93	Der Sänger (Was hör ich draußen vor dem Tor) 2,11	
II Nr.94	Italien (Kennst du das Land) 3,1	
II Nr.95	Klage (Wer nie sein Brot mit Tränen aß) 2,13	
II Nr.96	Einsamkeit (Wer sich der Einsamkeit ergibt) 2,13	
II Nr.97	Die Nacht (Singet nicht in Trauertönen) 5,10	
II Nr.98	Das Geheimnis (Heiß mich nicht redens) 5,16	
II Nr.99	Mignons letzter Gesang (So laßt mich scheinen) 8,2	初出 Deutschland III S.347 (1796)
II Nr.100	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt) 4,11	二重唱
II Nr.101	Letztes Lied des Harfenspielers (An die Türen) 5,14	新規作曲

ライヒャルトによるリート創作活動の集大成となる《ゲーテ歌曲集》(1809-11)では、10曲全が第2巻(1809)に掲載されている。最初に〈ただ憧れを知る人だけが〉の独唱ヴァージョン(Nr.92 S.51)^{*8}が配置され、その次の頁から〈ヴィルヘルム・マイスターの修行時代からの歌曲 Gesänge aus Wilhelm Meister's Lehrjahre〉という見出しを付けて、残る9曲が続くのだが、その曲順は小説とも詩集とも異なるライヒャルト独自のものであり、その意図は不明である。「表3：ライヒャルト《ゲーテ歌曲集》(1809)における曲順」を参照願いたい。

また、ライヒャルトは各曲にその内容にふさわしい固有の題名を与えている。その内、〈歌人 Der Sänger〉がコッタ1806年版『ゲーテ作品集』に由来し、〈ミニョン／豎琴弾き最後の歌 Mignons letzter Gesang／Letztes Lied des Harfenspielers〉が小説の配置に基づいていることは明かだとしても、その以外の題名は何に由来するのかということについて資料は何も残されていない。ただし、〈イタリア Italien〉と〈憧れ Sehnsucht〉という題名は、他の作曲家もしばしば用いている^{*9}。

ライヒャルトの《ゲーテ歌曲集》は当時のドイツにおいて最大の楽譜出版社であるBreitkopf & Härtel社から出版されているので、確証はないが、シューベルトがこれらを知っていた可能性もある。

2-2 ツェルター Karl Friedrich Zelter (1758 - 1832)

クセーニエン論争以降、ライヒャルトに代わってゲーテの第一音楽家となったツェルターは、小説の出版当初から晩年に至るまで《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》を作り続け、最終的には〈豎琴弾き〉4編7曲、〈ミニョン〉4編10曲を残した(断片を含む)。シューベルト同様、同じ詩に対して何回も作曲しているということであり、同じ詩に対する複数の作曲を重ねて出版している例もある。表4において作品の一覧を歌詞別に示す。

*8 ライヒャルトは各曲に番号を付けているわけではないが、整理のため、《ゲーテ歌曲集》第1巻冒頭から通し番号を付けて識別することにする。

*9 以下、簡略化のために各詩、各曲について次の略称を状況に応じて用いることにしたい。

〈ミニョンの歌：あの国を知っていますか Mignon: Kennst du das Land〉＝〈イタリア Italien〉

〈ミニョンの歌：ただ憧れを知る人だけが Lied der Mignon: Nur wer die Sehnsucht kennt〉
＝〈憧れ Sehnsucht〉

〈ミニョンの歌：語れと言わないで Mignon: Heiß mich nicht reden〉＝〈秘密 Geheimnis〉

〈ミニョンの歌：このままの姿でいさせて下さい Mignon: So laßt mich scheinen〉
＝〈ミニョンの最後の歌 Mignons letzter Gesang〉

〈豎琴弾きの歌：孤独に身を委ねる者は Harfenspieler: Wer sich der Einsamkeit ergibt〉
＝〈孤独 Einsamkeit〉

〈豎琴弾きの歌：戸口に忍び寄って Harfenspieler: An die Türen〉
＝〈豎琴弾きの最後の歌 Letztes Lied des Harfenspielers〉

〈豎琴弾きの歌：涙してパンを食べることのない者は Harfenspieler: Wer nie sein Brot mit Tränen aß〉
＝〈涙してパンを食べることのない者は〉

〈歌人：門の外に聞こえるのは Der Sänger: Was hör ich draußen vor dem Tor〉＝〈歌人 Der Sänger〉

表4：ツェルター《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》一覧

"Der Sänger"	1803(12)
"Klage"	1795(96)／1816(21)
"Einsamkeit"	1795(96)／1810/16?(-)／? Frag.／?
"Kennst du das Land?"	1795(96)／1812(28)／?／1817(27)／1818?Frag.／1818?(28)
"Sehnsucht"	1795(96)／1812(27)／?(1821)
"Harfenspieler II"	1818(-)
"Geheimnis"	1795(96)
"Mignon als Engel verkleidet"	1795/96(97)

数字は左が作曲年、括弧内は出版年を意味し、／を挟んで第2作、第3作を示す

作曲年代から見て、ほとんどの歌詞出典は後年の詩集ではなく、小説であると思われ、小説出版の翌年に早くも5曲を出版している。偶然というべきか、これらはライヒルトの付録楽譜が掲載された5編であるが、〈歌人〉と〈フィリーネ〉は含まれていない。

一方、ライヒルトが小説には掲載できず、1796年の『ドイツ』第Ⅲ巻において発表した〈ミニョンの最後の歌：このままの姿でいさせて下さい〉について、ツェルターは〈天使の仮装をしたミニョン Mignon als Engel verkleidet〉の題名でシラーが主宰する『詩神年鑑』1798年版(1797)に掲載している。出版年から考えて、小説の欠落を埋める意図があったのではないかと推測する。しかし、もう一つの残された詩、豎琴弾きの〈戸口に忍び寄って〉について、ツェルターも1818年まで手を付けることはなく、しかも未出版で終わっているため、穴埋めの意図については不明な点が多い。

多くが出版されているとはいえ、ばらばらの出版状況であるため、シューベルトがこれらの曲を知っていた可能性はむしろ低いのではないだろうか。なお、〈憧れ〉は全て独唱曲である。

2-3 ツムシュテーク Johann Rudolf Zumsteeg (1760-1802)

若い頃のシューベルトが傾注していたツムシュテークが作ったのは〈『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』より：語れと言わないで Aus "Meister Wilhelms Lehrjahren" Heiß mich nicht reden〉1曲だけであるが、1805年に出版された《バラードとリート小集 Kleine Balladen und Lieder》第7巻(Nr.10 S.13)に掲載されているので、シューベルトが知っていた可能性は高いだろう。

2-4 ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ベートーヴェンは1808年に〈憧れ〉(独唱)を出版した(WoO.134)。興味深いことに、この楽譜には4種の付曲が並列して掲げられている。翌年、今度は作品75の第1曲として〈ミニョン(イタリア)〉が出版された。もちろん、シューベルトがこれらの曲を知っていた可能性は高く、後述するように影響を与えた可能性もある。

2-5 シューマン Robert Schumann (1810-56)

シューマンは1849年に《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集 Lieder und Gesänge aus Wilhelm

Meister》op.98a 全9曲を作曲し、1851年に出版した。〈憧れ〉(独唱)、〈フィリーネ〉を含む女声5曲の間に男声4曲が挟まれ、男女交互に歌うように配置されている。ミニヨンおよび豎琴弾きの歌はそれぞれ小説順に並べられているが、〈フィリーネ〉のみ順番を崩して7曲目に置かれている。なお、1曲目の〈ミニヨン(イタリア)〉は1849年に作曲、出版した《少年の歌のアルバム Lieder-Album für die Jugend》op.79にも終曲として掲載されている。

2-6 ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903)

ヴォルフは1888年10月から12月にかけて《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》に取り組み、それは1890年に出版した《ゲーテの詩による歌曲集 Gedichte von J.W.v.Goethe》の冒頭を飾ることになった。ただし、《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》の表記はない。曲順は基本的に男女を逆にした詩集順であるが、ゲーテが詩集に採用していない俗謡〈俺は哀れな悪魔 Ich armer Teufel〉(3,9)を含むので、小説と詩集の両方を参照していたことが分かる。全10曲は豎琴弾き3曲(詩集順)、俗謡、ミニヨン3曲(詩集順)、〈フィリーネ〉、詩集第1巻(〈イタリア〉、〈歌人〉)の順となっている。〈憧れ〉は独唱曲として作曲されている。

3. シューベルトによるヴィルヘルム・マイスター歌曲

シューベルトは最初のゲーテ歌曲である〈糸を紡ぐグレートヒェン Gretchen am Spinnrade〉op.2 D118 (1814)の3ヶ月後、1815年2月にコッタ1806年版『ゲーテ作品集』219頁に掲載されていた〈歌人 Der Sänger〉D149に作曲した。これを皮切りに、1826年1月に作曲して翌27年3月2日に発売された《『ヴィルヘルム・マイスター』からの歌 Gesänge aus "Wilhelm Meister"》op.62 D877まで、8編の詩を用いて18曲を作曲している。「表5：シューベルトによる《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》一覧表」を参照願いたい。前述のように、〈憧れ：ただ憧れを知る人だけが〉は6曲が残され、シューベルトの全創作中、最多の改作数を誇る。

彼の取り組みは4つの時期に集中しているので、年代順に検討しよう。

3-1 1815年 最初の試み／豎琴弾き+ミニヨン

D149	Der Sänger (Was hör ich draußen vor dem Tor)	Febr.1815	WM II 11/I 162
D310	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt)	18.Okt.1815	WM IV 11/II 114
D321	Mignon (Kennst du das Land)	23.Okt.1815	WM III 1/I 161
D325	Harfenspieler (Wer sich der Einsamkeit ergibt)	13.Nov.1815	WM II 13/II 116

シューベルトの《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》への取り組みは1815年2月に始まり、その後、10月から11月に掛けて多少の集中が見られる。この段階ではコッタ1815年版『ゲーテ作品集』をまだ手に入っていないはずなので、コッタ1806年版の詩集と小説『ヴィルヘルム・マイスター

の修業時代』を使用したのであろう。

表5：シューベルト《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》一覧

D番号 Op.	題名 作曲年	出版年	歌 詞 調 拍子	冒 頭 曲 想	歌 詞 出 典 小 節	楽 譜
D149	Der Sänger Febr.1815 ?		Was hör ich draußen vor dem Tor D 4/4 D 4/4	Mäßig, heiter Heiter, mäßig geschwind	WM2,11 / Cotta, 1806, S.219 / I 162 129 151	NGA7,90 NGA7,97 2.Goethe-Heft
D310	Sehnsucht 18.Okt.1815 18.Okt.1815		Nur wer die Sehnsucht kennt As 2/2 F 2/2	Sehr langsam, mit Ausdruck Sehr langsam, mit höchstem Affekt	WM4,11 / II 114 35 39	NGA3b,218 NGA3b,220 2.Goethe-Heft
D321	Mignon 23.Okt.1815 Mai 1816		Kennst du das Land A 2/4 A 2/4	Mäßig Mäßig	WM3,1 / I 161 77 81	NGA9,177 NGA9,181 2.Goethe-Heft
D325	Harfenspieler 13.Nov.1815		Wer sich der Einsamkeit ergibt a 6/8	Klagend	WM2,13 / II 116 40	NGA1b,218
D359	Sehnsucht 1816		Nur wer die Sehnsucht kennt d 6/8	—	WM4,11 / II 114 45	NGA3b,222
[D403]	Lied 27.März 1816 April 1816 März 1816 August 1823		Ins stille Land g 6/8 a 6/8 a 6/8 a 6/8	Mäßig Mäßig, mit Sehnsucht Langsam, mit Sehnsucht Mit Sehnsucht	Johann Gaudenz von Salis-Seewis 23 22 24 29	NGA10,108 NGA10,110 NGA10,112 NGA10,114
D469	Mignon (Fragment) Sept.1816 Sept.1816		So laßt mich scheinen As 2/4 G 4/4	Langsam —	WM8,2 / II 115 7 11	NGA3b,254 D478,2 裏面 NGA3b,254 D478,2 裏面
D478.1	Harfenspieler I Sept.1816 op.12,1 Sept.1816	13.Dez.1822	Wer sich der Einsamkeit ergibt a 2/2 a 2/2	Langsam Sehr langsam	WM2,13 / II 116 51 52	NGA1,220 NGA1,85
D478.2	Harfenspieler III Sept.1816 Sept.1816 op.12,2 1822	13.Dez.1822	Wer nie sein Brot a 6/8 a 2/4 a 2/2	Klagend Etwas geschwind Langsam	WM2,13 / II 118 14 41 66	NGA1,224 NGA1,224 NGA1,89
D478.3	Harfenspieler II Sept.1816 op.12,3 Sept.1816	13.Dez.1822	An die Türen a 2/2 a 2/2	Mäßig Mäßig, in gehender Bewegung	WM5,14 / II 117 52 50	NGA1,226 NGA1,93
D481	Sehnsucht Sept.1816		Nur wer die Sehnsucht kennt a 2/4	Langsam	WM4,11 / II 114 25	NGA3b,224
D656	Sehnsucht Quintett April 1819		Nur wer die Sehnsucht kennt E 2/2	Langsam	WM4,11 / II 114 63	NGA III 4,98
D726	Mignon I April 1821		Heiß mich nicht reden h 2/5	Langsam	WM5,16 / II 113 59	NGA3b,227
D727	Mignon II April 1821		So laßt mich scheinen h 2/2	Langsam	WM8,2 / II 115 64	NGA3b,230
D877.1	Mignon und Harfner Duett op.62,1 Jan.1826	2.März 1827	Nur wer die Sehnsucht kennt h 2/2	Langsam	WM4,11 / II 114 50	NGA3,113
D877.2	Lied der Mignon op.62,2 Jan.1826	2.März 1827	Heiß mich nicht reden e 2/2	Langsam	WM5,16 / II 113 42	NGA3,117
D877.3	Lied der Mignon op.62,3 Jan.1826	2.März 1827	So laßt mich scheinen H 3/4	Nicht zu langsam	WM8,2 / II 115 47	NGA3,120
D877.4	Lied der Mignon op.62,4 Frühling 1826	2.März 1827	Nur wer die Sehnsucht kennt a 6/8	Langsam	WM4,11 / II 114 46	NGA3,122

〈歌人〉D149、〈憧れ〉D310、〈イタリア〉D321の3曲は、友人達の勧めに従って歌曲の出版を企画した際に、ゲーテの元に送ろうと準備していた浄書譜《ゲーテ歌曲集 Goethe Heft》第2巻 (Bibliothèque Nationale, Paris, Ms.273, Ms.276) に掲載したものであった (村田2018)。友人のアルベルト・シュタードラー Albert Stadler (1794-1888) はそのいきさつについて「このときシュパウンは今ではよく知られている『ファウスト』と『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』からの歌曲を清書した楽譜集に丁重な手紙を付けて直接ゲーテに送った。これには返事が来なかった (Deutsch 1957: 172/1978: 180)」と述べている。

この段階でシューベルトが「歌曲集」を意識していたかどうか定かでないが、まとまった詩と考えていたことは確かだろう。また、出版が実現しなかったにも拘わらず、改訂を施し、作品としての質を上げようとしていたことが分かる。

〈歌人〉は若い頃のシューベルトがしばしば用いた、レチタティーヴォを挟んだバラードであり、小姓の走りや豎琴、宴会の様子が音楽的に描写されている。改訂に当たって、旋律を変更し、間奏を追加するなどした上で、更に最終3行を繰り返すことによって曲全体を拡張している。〈憧れ〉と〈イタリア〉では、感情表現を拡大する方向で改訂し、やはり曲の規模を大きくしている。

〈憧れ〉では〈目眩がし、腑が焼けるようだ Es schwindelt mir, es brennt das Eingeweide.〉という歌詞を16分音符のトレモロで表現しているという点にも注目すべきである。この方法は既にベートーヴェンが第4作において用いており、ライヒャルトの独唱稿にも近い表現が見られる。シューベルトがこれらを参照していたかということについて確証はないが、その可能性はかなり高いと言えるだろう。

3-2 1816年 2回目の挑戦／ミニヨン+豎琴弾き

D359	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt)	1816	WM IV11／II114
D469	Mignon (So laßt mich scheinen)	Sept.1816	WM VIII2／II115
D478,1 op.12,1	Harfenspieler I (Wer sich der Einsamkeit ergibt)	Sept.1816	WM II13／II116
D478,3 op.12,3	Harfenspieler II (An die Türen)	Sept.1816	WM V14／II117
D478,2 op.12,2	Harfenspieler III (Wer nie sein Brot)	Sept.1816	WM II13／II118
D481	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt)	Sept.1816	WM IV11／II114

《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》への第2期の取り組みはすぐ続いて、1816年に行われた。この時には既に、コッタ1815年版『ゲーテ作品集』を手に入れていたことが、豎琴弾きの歌3曲を詩集の順に作曲していることから分かる。豎琴弾きとミニヨン両方の詩に作曲しているというだけではなく、〈豎琴弾きの歌Ⅲ〉D478,2の自筆譜 (Wiener Stadtbibliothek, MH89) の裏面に〈ミニヨン (このままの姿でいさせて下さい)〉D469のスケッチが書かれているということからも、〈ミニヨン歌曲〉も含めた《ヴィルヘルム・マイスター歌曲》としてのまとまりを意識していただろうと思われる。

第2期には〈憧れ〉の第2作 D359と第3作 D481が生み出され、いずれにもトレモロの描写

が用いられ、歌詞の最終2行を繰り返すという方法も第1作から受け継がれた。

相前後する時期に作られた3曲の〈堅琴弾きの歌〉D478についてはもう少し詳しい説明が必要だろう。この3曲は1822年になってから『ヴィルヘルム・マイスター』より堅琴弾きの歌 *Gesänge des Harfners aus 'Wilhelm Meister'* op.12 D478として出版されることになった^{*10}。〈堅琴弾きの歌Ⅰ HarfenspielerⅠ: Wer sich der Einsamkeit ergibt〉op.12,1 D478,1と〈堅琴弾きの歌Ⅱ HarfenspielerⅡ: An die Türen〉op.12,3 D478,3については、作曲してすぐに小さな改訂を施し、1822年の出版までそのまま置いていたであろう^{*11}。

ところが、残る〈堅琴弾きの歌Ⅲ HarfenspielerⅢ: Wer nie sein Brot mit Tränen aß〉D478,2 op.12,2はそうはいかなかった。現在3種の自筆稿(Wiener Stadtbibliothek, MH88, MH89)が残されているが、1816年9月の日付がある第1稿と第2稿は拍子や速度も異なり、全く別の付曲というべきだろう。しかも第1稿には大きく×印も付けられ、シューベルトが納得していないということが分かる。第2稿にも満足はできなかったようで、1822年の出版に際して、新たに作り直すことになった(出版は次の第3期よりも後のことではあるが、ここで続けて述べることにする)。堅琴の描写は第1稿を、歌詞を繰り返すという点では第2稿を受け継いだともいえる。しかし、旋律は似ても似つかぬものとなり、曲の規模も拡大し、イ短調という以外、前作とは無関係とするべきであろう^{*12}。

〈堅琴弾きの歌Ⅲ〉の完成によって『ヴィルヘルム・マイスター』より堅琴弾きの歌の出版準備が整い、1822年12月13日に出版が宣伝された。これは1821年4月の〈魔王 Erlikönig〉op.1 D328に始まる一連の出版計画の延長上に位置づけられる。〈魔王〉が1815年10月の作曲であり、作品2の〈糸を紡ぐグレートヒェン〉op.2 D118が1814年11月の作曲であることに比べれば作曲から出版までの時間がまだ短いとはいえ、『堅琴弾き歌曲集』も満を持して出版にこぎ着けたということになる。

ところがこの時、重大な変更が施された。前述のように、シューベルトは詩集の順番に従って作曲し、その順に番号も振った。これに対して出版譜では第2曲と第3曲が入れ替えられ、〈孤独 Wer sich der Einsamkeit ergibt〉、〈戸口に忍び寄って An die Türen will ich schleichen〉、〈涙してパンを食べることのない者は Wer nie sein Brot mit Tränen aß〉の順となっているのである。これは、小説の順とも異なっており、シューベルト独自の曲順ということになる。

これについて堀朋平は〈戸口に忍び寄って〉の歌詞に「天上と地上の隔絶」、シューベルトの罪の意識を読み取り、それを歌曲集の中心に据えたのだ解釈する(堀2016: 60-63)。一方、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ Dietrich Fischer-Dieskau(1925-2012)は〈孤独〉、〈戸口

*10 本稿では1822年出版の作品12と1827年出版の作品62を区別するために、前者を《堅琴弾き歌曲集》、後者を《ミニオン歌曲集》と呼ぶことにしたい。ただし、作品62にはミニヨンの歌だけが収められているのではなく、ミニヨンと堅琴弾きの二重唱も収められているので、この呼称はあくまでも便宜的なものにすぎない。

*11 後述するように、シューベルトが作曲時(詩集順)と出版時で曲順を変更しているため、シューベルト自身が自筆譜に書き込んだ「2」及び「3」という数字と、出版譜における番号、ならびにドイツ番号の枝番は一致しない。ローマ数字は自筆譜の番号を表す。

*12 堀朋平は〈戸口に忍び寄って〉3稿のみならず、作品12の《堅琴弾きの歌曲集》を構成する3曲がいずれもイ短調で書かれているということの意味を強調している(堀2016: 60-63)。

に忍び寄って〉、〈涙してパンを食べることのない者は〉の順とすることによって「竖琴弾きの紹介」、「孤独の理由」、「老人の完全な疎外による締めくり」という意味を持つと言う (Fischer-Dieskau 1971: 96/1976: 123)。なるほどこれらのように考えるなら、シューベルトが独自の曲順を選択したことに説明が付くだろう。

もっとも、この変更はシューベルトの意図ではなく、出版準備の事情による可能性もある。果たしてシューベルトの意図がどうだったのか、今となっては知るよしもない。

3-3 1819-21/22年 3回目の挑戦／ミニョンのみ

D656	Sehnsucht (Nur wer die Sehnsucht kennt) Quintett	April 1819	WM IV11／II114
D726	Mignon I (Heiß mich nicht reden)	April 1821	WM V16／II113
D727	Mignon II (So laßt mich scheinen)	April 1821	WM VIII2／II115

第3期は集中というには多少時期が長いし、前述のように、《竖琴弾き歌曲集》の作曲、出版の時期と交錯している。

まず、1819年に〈憧れ〉第4作D656を今度は男声五重唱として作曲する。そのしばらく前からシューベルトは男声のための重唱曲に精力を注いでおり^{*13}、ここで五重唱という編成を選んだのもその流れで考えることができる。無伴奏であるため、ピアノのトレモロを用いるわけにはいかなかったが、〈目眩がし、腑が焼けるようだ〉という歌詞はこの曲でも描写的に表現されている。

一方、ミニョンの2曲は出版活動が始まった1821年4月に、同じ紙に続けて作曲されている (Wiener Stadtbibliothek, MH99)。〈竖琴弾き歌曲集〉について出版の見込みが出てきたので、次の段階として〈ミニョン歌曲集〉に取りかかったということであろうか。いずれも口短調2分の2、ゆっくり Langsam で始まり、口長調で終わるという共通点があり、3詩節からなる〈ミニョンI 語れと言わないで Mignon I : Heiß mich nicht reden〉D726は三部形式、4詩節の〈ミニョンII このままの姿でいさせて下さい Mignon II : So laßt mich scheinen〉D727は変奏有節形式という点が異なっている。

3-4 1826年 最後の挑戦／ミニョンのみ

D877,1	op.62,1	Mignon und Harfner (Sehnsucht) Duett	Jan.1826	WM IV11／II114
D877,2	op.62,2	Lied der Mignon (Heiß mich nicht reden)	Jan.1826	WM V16／II113
D877,3	op.62,3	Lied der Mignon (So laßt mich scheinen)	Jan.1826	WM VIII2／II115
D877,4	op.62,4	Lied der Mignon (Sehnsucht)	Jan.1826	WM IV11／II114

1826年1月に、シューベルトは『ヴィルヘルム・マイスター』からミニョンに関わる4編の詩に

*13 例えば1817年に作った《小さな村 Das Dörfchen》op.11,1 D598が1819年11月19日に楽友協会のコンサートで公開初演されたということも、シューベルトの重唱への関心を高めたことであろう (Hilmar 1993: 17; Hilmar 2003: 23)。

集中的な作曲をし、それらは翌27年3月2日に《『ヴィルヘルム・マイスター』からの歌》op.62(=《ミニョン歌曲集》)として出版された。残されている自筆スケッチ(Wiener Stadtbibliothek: MH 180)の状況から考えると、シューベルトが連作として意識していたことは明らかで、最初の3曲は一連の紙(3枚12頁)に続けて書き出されている。これに対して最後の1曲は少し遅れて付曲された可能性が高く、出版社アントン・ディアベリ Anton Diabelli(1781-1858)の筆跡による「第4番 ミニョンの歌(ただ憧れを知る人だけが) Nr.4 Lied der Mignon(Nur wer die Sehnsucht kennt)」という書き込みがある(Wiener Stadtbibliothek: MH 2063)。

シューベルトはこの時、詩集を所持していたと考えられるが、小説も参照していたことは明白であり、第1曲の〈憧れ〉は小説に書かれている「ちょうどその時、ミニョンと竖琴弾きが不釣り合いな二重唱で心を込めて歌った歌 das eben in dieser Stunde Mignon und der Harfner als unregelmäßiges Duett mit dem herzlichsten Ausdruck sangen」という設定に合わせて、ソプラノとテノールの二重唱とした。小説への付録楽譜であったライヒャルトの作曲は当然二重唱として書かれているが、他の作曲家はいずれもこの詩を詩集に従ってミニョンの独唱として作曲しているので、シューベルトが第5作で小説の設定に戻って付曲していることは珍しい。

ソプラノ(ミニョン)が先に歌い出し、テノール(竖琴弾き)がそれを追いかける。中間部ではこれまでの4作同様、トレモロによる心情描写を行い、最後はテノールが先導する形で曲を締めくくる。しばしばテノールが記譜上でソプラノを超える高音を歌い、二つの声作り出す緊張感が美しい。

シューベルトはこの歌詞を歌曲集の終曲(第4曲)としてもう一度用いた。マイケル・ホール Michael Hall(1932-2012)はディアベリの要請(Hall 2003: 154)としているが、それを示す証拠は残されていないため、真相は分からない。

興味深いのは第4曲(この歌詞の第6作)がオリジナルな音楽ではなく、ヨハン・ガウデンツ・フォン・ザリス=ゼーヴィス Johann Gaudenz von Salis=Seewis(1762-1834)の詩を用いて1816年3月27日に作った《リート：静かな国へ Lied: Ins stille Land》D403に手を加えたものだというのであろう。《静かな国へ》は1816年4月、同11月、更に1823年8月に計3回の改訂を加えており、シューベルトにとって気になる詩、気になる旋律であったのだろう。4稿(Staatsbibliothek, Berlin, Mus.ms.autogr. Schubert, F. 34; Wiener Stadtbibliothek, MH5390)の書き込まれた状況、改変の様子から考えると、1826年の段階でシューベルトの手元にあったのは第4稿と推定される。

イ短調8分の6拍子で、曲想標語「憧れを持って Mit Sehnsucht」が添えられていることも、この旋律を用いるきっかけとなったのかも知れない。いずれもヤンプスの律格により、詩脚数が行によって不定であるため、リズムを細分化し、あるいは言葉を繰り返すことによって《静かな国へ》に〈憧れ〉をはめ込むことはさほど苦労なくできそうに見える。ピアノのパートも含めて、原曲との一致度は極めて高い。「表6:《静かな国へ》、〈憧れ〉歌詞比較表」および「《静かな国へ》、〈憧れ〉比較総譜」(『新シューベルト全集』を原譜として作成)を参照されたい。

《静かな国へ》、《憧れ》 比較総譜

Mit Sehnsucht

Lied (D403)
T.1-12

Langsam

Sehnsucht (D877,4)
T.1-15

Ins sil - le Land... wer lei - tet uns hin - ü - ber, ins stil - le Land... wer lei - tet uns hin - ü - ber?

Nur wer die Sehnsucht kennt, weiß, was ich lei - de, nur, wer die Sehnsucht kennt, weiß, was ich lei - de.

Lied (D403)
T.12-20

Sehnsucht (D877,4)
T.15-21

Schon wölle sich uns der A - beid hin und rei - ßen, und im - mer trüben mit vol - ler wird der Stand

Al - lein und ab - ge - trennt von al - ler Freu - de, seh ich aus Fir - ma - ment nach je - ner... Sei - te.

22 (sehr leise) *dim.* *a tempo*

Ach, der mich liebt und kennt, ist — in — der Wei — te.

Es schwin — delt mir, es brennt mein Ein — ge — wei — de, es

ppp *cresc.* *f*

Sehnsucht (D877,4)
T.22-33

schwin — delt mir, es brennt mein Ein — ge — wei — de.

decresc. *p* *decresc.*

Wer lei — tet uns, mit sanf — ter Hand hin — ü — ber, ach, hin — u — ber, ins stil — le Land, ins stil — le Land?

pp *cresc.* *pp* *dim.*

Lied (D403)
T.21-29

Nur wer die Sehnsucht kennt, weiß, was ich lei — de, nur wer die Sehnsucht kennt, will, was ich lei — de.

pp *f* *pp* *cresc.* *pp* *legato*

Sehnsucht (D877,4)
T.34-56

表6：《静かな国へ》、〈憧れ〉歌詞比較表

Nur wer die Sehnsucht kennt 877,4	Lied D403 (Salis-Seewis)
♩ Nur wer die Sehnsucht kennt, Weiß, was ich leide! ♪ Allein und abgetrennt / Von aller Freude, Seh ich ans Firmament / Nach jener Seite. Ach! der mich liebt und kennt, Ist in der Weite. Es schwindelt mir, es brennt Mein Eingeweide. Nur wer die Sehnsucht kennt, Weiß, was ich leide! Nur wer die Sehnsucht kennt, Weiß, was ich leide!	♩ Ins stille Land! Wer leitet uns hinüber? ♪ Schon wölkt sich uns der Abendhimmel trüber, Und immer trümmervoller wird der Strand. Wer leitet uns mit sanfter Hand Hinüber! ach! hinüber, Ins stille Land? Ins stille Land?

ところがシューベルトは単に歌詞を置き換えるだけでは終わらさなかった。ここでも中間部(Ach! der mich liebt und kennt, ~ Mein Eingeweide.)にトレモロを用いた描写表現を挟み込み、この部分については新しく作曲しているのである。この事実から考えても、シューベルトは独唱用〈憧れ〉を急いで作るために手近にあった過去の曲を援用したのではなく、《静かな国へ》の旋律を用いる積極的な意思を持っていたであろうと思われる。

中間の〈ミニヨン〉2曲について、1821年の作品は調の構造も拍子、速度もやや似た性格を持っていたが、今回の最終作は対照的な作品となっている。そして詩集のようにこれら2作でもって〈憧れ〉を挟むのではなく、〈憧れ〉(二重唱曲)の後に置かれているということから考えると、シューベルトは小説の順番に従って配置したのであると思われる。

歌曲集の現状から見ると、2曲の〈憧れ〉によって〈ミニヨン〉2曲を挟んでいるように見えるが、準備の整った3曲の版刻を先に行い、後で作った〈憧れ〉(独唱)は最後に置いたという可能性がある。

4. 当時の評価

次に、これらの作品が、当時どの様な評価を受けていたのか見ていくことにしよう。残されている言説は、先に出版された《竖琴弾き歌曲集》の方が多い。

1822年12月13日の『ウィーン新聞』287号4頁(通巻1148頁)に掲載された《竖琴弾き歌曲集》op.12の出版広告には、「ゲーテのヴィルヘルム・マイスターからの詩には既にしばしば作曲されてきたが、これほど深く感じられ、真に心を引きつけるものは滅多にない(Deutsch 1964: 173f.; Hilmar 1993: 145f.)。」と書かれている。

これに対して1827年3月2日の『ウィーン新聞』に掲載された《ミニヨン歌曲集》op.62の出版

広告では、単に曲名と金額などが示されているだけで、曲の評価に関わる言及はない(Deutsch 1964: 411f.; Hilmar 1993: 313f.)。

《豎琴弾き歌曲集》に関わるシューベルトの友人達による主な追想を2つ挙げよう。

19世紀初頭にウィーンで女優として活躍していたアントーニエ・アルネート(旧姓アダムベルガー) Antonie Arneth(Geb. Adamberger, 1790-1867)は、シューベルトの墓碑銘を書いた著名な詩人劇作家、フランツ・ Grillparzer(1791-1872)が出席した音楽会について、次のような回想を残す。

「午後に音楽会が開かれて、私はシューベルトのリートをとても楽しんで歌いました。Grillparzerは本来音楽的な人ですから、私が思うには、これらの才能あるリート作曲家たちに心の最も深くから共感を持てたのでした。《水車屋歌曲集》の後で、更に何曲かの明るいリートの後で、私は《ヴィルヘルム・マイスター》を歌いました…私のうぬぼれをお許し下さい…私はそのときのことを決して忘れないでしょう。その後で、私は豎琴弾きの歌〈孤独に身を委ねる者は〉を歌い終わりました。そして彼[Grillparzer]は呆然と座って前方を見つめていました。すると誰かが言いました。『なんと素晴らしい歌だ!』彼は不思議そうに私を眺め、静かな声で『そう、この声に、この作品に、そしてこの歌詞に十分に耳を傾けねばならないのなら、何もわかりはしない。』と言いました。褒め言葉だったのでしょうか?いかなる賞賛もこの言葉に代わるものではありません。彼の言葉はそれほどうれしいものでした(Deutsch 1957: 257f./ 1978: 271)。」

シューベルトの親友であるヨーゼフ・フォン・シュパウン Josef von Spaun(1788-1865)は1858年になってからの追想の中で、「彼自身優れた音楽家である宮廷顧問官のモーゼルは、これほどの曲は未だかつて見たことがないと何度も説明しました。豎琴弾き歌曲の中でも〈戸口に忍び寄って〉はシューベルトがいかに旋律を豊かに持っているかということだけではなく、基本的な音楽家であることを示している傑作であると彼は言うのでした」と報告している(Deutsch 1957: 155/ 1978: 161)。

〈ミニョン〉にも言及した数少ない発言として、シューベルトの保護者であり、最大の理解者であったバリトンのヨハン・ミヒャエル・フォークル Johann Michael Vogl (1768-1840)の日記への書き込みを紹介したパウエルンフェルトの次の文章が存在する。

「よく用いられている声楽教則本の欠陥をシューベルトのリートほど明瞭に示しているものはない。そうでないとするのなら、ドイツ語を話す世界の中で、この真に神々しい靈感、この音楽的透視術の実現が普遍的で巨大な影響に一体何をなしたというのだろうか?言語、音に託された詩、和声を与えられた言葉、音楽を身に纏った思想が言わんとするところのものを、どれだけ多くの人が恐らく最初から理解したであろうか。我々の最も偉大な詩人の最も美しい詩の言葉が音楽に移し替えられ、なお高められ、さらに凌駕されることを知ったことだろう。その例は無数にある。《魔王》、《糸を紡ぐグレートヒェン》、《馭者クロノスに》、《ミニョン》— そして《豎琴弾き歌曲集》、シラーの《憧れ》、《巡礼者》、《人質》(Deutsch 1957: 259f./ 1978: 274)。」

そして曲に対する直接の評価ではないが、ベルリンのオペラ歌手アンナ・パウリーネ・ミルダー Anna Pauline Milder(1785-1838)が1825年6月9日にベルリンの演奏会で《ミニョンの歌：あの国をご存じですか》D321を歌う予定なので楽しみだという内容の記事が8日付けの『ベルリン新聞』に掲載されている(Hilmar 1993: 246)。もっとも、後日出された演奏会評の記事(Deutsch 1964: 289; Hilmar 1993: 246ff.)において、一緒に歌われた《魔王》などについては触れられていても、《ミニョンの歌》への言及はない。

このように、《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》は当時から評価されていたことが分かる。先に紹介したアルネートの演奏会にシューベルト自身も参加していたとすれば、彼は一体どう感じたことだろうか。

おわりに　－シューベルトにとっての《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》－

シューベルトが「ミニョン」と「豎琴弾き」の《ヴィルヘルム・マイスター詩群》を、まとまりのある一群の詩として意識していたことは明らかであろう。単独で採り上げることがほとんどなく、常に何曲かを組み合わせて作ろうとしていたことからそれが分かる。特に、1816年と1826年には「連作」を強く意識し、1822年の作品12、1827年の作品62として出版を実現させている。

さらに、彼は「ミニョン」と「豎琴弾き」を別々の詩群として考えていたのではなく、関連があると考えていたことも創作経緯から推測できる。すなわち、1816年に作られた〈涙してパンを食べない者は〉D478,2の草稿裏面に〈このままの姿でいさせて下さい〉D469のスケッチが描かれているのである。

結局彼は、2つの歌曲集として出版し、それらの関係については何も発言してはいない。しかし、これら2つの歌曲集を連結し、7曲からなる連作歌曲集として扱う可能性もあるのではないだろうか。その場合、男声用歌曲3曲、二重唱、女声用歌曲3曲が集められ、異なる声種、異なる編成がまとめられることになる。しかし彼は1825年から26年にかけて作った《スコットの『湖上の美人』による歌曲集 Sieben Gesänge aus Walter Scott's Fräulein vom See》op.52において、異なる編成の結合を経験していた。

《スコット歌曲集》は以下の7曲からなる。op.52,1〈エレンの歌 I Ellens Gesang I〉D837(女声独唱)、op.52,2〈エレンの歌 II Ellens Gesang II〉D838(女声独唱)、op.52,3〈ボートの歌 Bootgesang〉D835(男声四重唱)、op.52,4〈挽歌 Coronach〉D836(女声三部合唱)、op.52,5〈ノルマンの歌 Normans Gesang〉D846(男声独唱)、op.52,6〈エレンの歌 III Ellens Gesang III〉D839(女声独唱)、op.52,7〈囚われの狩人の歌 Lied des gefangenen Jägers〉D843(男声独唱)¹⁴。このように、男女の独唱、男女のアンサンブルが混ざり合っていることになり、シュー

*14 〈エレンの歌〉3曲を男声歌手が歌うことは稀だが、〈ノルマンの歌〉と〈囚われの狩人の歌〉を女声歌手が歌うことは珍しくない。リート作品を男声用、女声用と区別してしまうことに疑問も感じるが、とりあえずここでは、元のスコットの叙事詩における設定に従って「男声用」、「女声用」とした。

ベルトは一つの歌曲集に声種や編成が異なる曲を入れるということを経験済みであった。《スコット歌曲集》の自筆譜が消失しているため、正確な作曲時期は分らないが、1825年4月頃から作曲を開始し、1826年4月5日に出版されており、これはまさに《ミニヨン歌曲集》の創作時期と重なっているのである。

このように考え、シューベルトの想いを付度すると、《竖琴弾き歌曲集》op.12と《ミニヨン歌曲集》op.62をひとまとめとして演奏するという選択肢も想定可能なのではないだろうか。これによって、シューベルトが永く温めていた《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》を作るという構想を実現することができるように思う。

そうすると、次は曲順が問題となる。小説順、あるいは詩集順に戻すということも考えられるが、その場合は、2曲の〈憧れ〉(二重唱と独唱)をどう扱うかという問題がある。そこで、二重唱には《竖琴弾き歌曲集》と《ミニヨン歌曲集》を繋ぐ役割を与えたい。つまり、前半が男声用3曲、二重唱を挟んで後半に女声用3曲としてはどうだろうか。《ミニヨン歌曲集》の曲順は2曲の〈憧れ〉を離れた位置に配置するために作品62の通りに歌うことが想定でき、《竖琴弾き歌曲集》は作品12の曲順でも良いし、シューベルトの作曲順することも考えられる。先に、〈戸口に忍び寄って〉と〈涙してパンを食べることのない者は〉の曲順についての見解を紹介したが、3曲で完結させるわけではないので、それに拘る必要はないと考える。

さらに、ゲーテが詩集第1巻に収めた2つの詩、〈歌人〉と〈イタリア〉を一緒に歌おうとするのなら、この2曲で2つの歌曲集を挟むことができるだろう。二重唱の繋ぎとしての位置付けが守られる上に、D-durで始まりa-mollを挟んでA-durで終わることになるので、調の配置も適切である。そして最後を〈イタリア〉によって力強く終わることができる。もっとも、これはシューベルトが残したいかなる資料によっても裏付けられないことであるが、演奏者の選択として許されることだと思う。

ここでもう一度、1827年の発言を思い出そう。友達との会話の中で思わず口から出るということは、『ヴィルヘルム・マイスター』に関わる2冊目の歌曲集を出版した後も、シューベルトにとってまだ気に掛かる歌詞だったということの意味していよう。シューベルト本人が2つの歌曲集を繋げるという発想を持っていた証拠はない。そして、ジョイント形式の演奏会か、ゲスト出演を依頼しなければならないとしても、演奏の可能性を広げることができるのではないだろうか。後世の解釈者、演奏者の自由としてこのような演奏法を考えることも一つの楽しみ方だと思いたい。

(本学教授＝音楽学担当)

一次資料（後年の校訂楽譜等を含む）

- Arnim, Achim von 1810 "*Geschichte der Gräfin Dolores*"
<https://www.projekt-gutenberg.org/arnim/dolores/dolores.html>
- Bauernfeld, Eduard von 1869 'Aus Alt= und Neu=Wien. Einiges von Franz Schubert' II,
in "*Die Presse*" 21. April 1869 (22.Jg. 116.Heft). (Deutsch 1957: 270 / 1978: 285)
- 1841 'Die Erinnerung an J.M.Vogl' "*Allgemeine Theaterzeitung*"
34.Jg. 106.Heft (4.Mai) S.1-2, 107.Heft (5.Mai). (Deutsch 1957: 259 / 1978: 274)
- Beethoven, Ludwig van (hrsg. v. Lühning) 1990 "*Beethoven Sämtliche Lieder*",
München: G.Henle Verlag.
- Goethe, Johann Wolfgang von 1796 'Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten' in "*Die Horen*"
[Bielefeld-Digitale Sammlungen]
http://ds.ub.uni-bielefeld.de/viewer/image/2104386_001/1/LOG_0003/
- 1795-96 "*Wilhelm Meisters Lehrjahre*", Berlin: J.F.Unger.
(ND 1980, Frankfurt a.M.: Insel)
 - 1806-10 "*Goethe's Werke*", Tübingen: J.G. Cotta'schen Buchhandlung.
 - 1815-19 "*Goethe's Werke*", Tübingen: J.G. Cotta'schen Buchhandlung.
- Goethe u. Schiller 1797 'Xenien' in "*Musenalmanach für das Jahr 1797*" S.19-302 [books google]
https://books.google.co.jp/books?id=ZVDRjceylAgC&pg=PA2&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=onepage&q&f=false
- Hecker, Max (Hrsg.) 1925 "*Die Briefe Johann Friedrich Reichardts an Goethe*"
[Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft / Zeitschriftenband (1925) S.197-252]
- Reichardt, Johann Friedrich 1806 "*Le Troubadour*" Berlin: H.Frölich.
- 1809 "*Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen*" Leipzig: Breitkopf und Härtel.
(ND 1964 EDM58)
- Schubert, Franz Peter (hrsg.v. Walther Dörr) 1970
"Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke" Serie IV: Lieder, Band 1
- 1974 "Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke"
Serie III: Mehrstimmige Gesänge, Band 4
 - 1979 "Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke" Serie IV: Lieder, Band 7
 - 1982 "Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke" Serie IV: Lieder, Band 3
 - 2002 "Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke" Serie IV: Lieder, Band 10
 - 2011 "Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke" Serie IV: Lieder, Band 9
- Schumann, Robert (hrsg.v. Ulrich Mahlert) 1991
"Lieder-Album für die Jugend op.79" Wiesbaden: Breitkopf & Härtel.
- Schumann, Robert (hrsg.v. Ozawa u. Wendt) 2009 "*Robert Schumann. Neue Ausgabe sämtlicher Werke*", Serie 6: Lieder, Band. 6,1, Mainz u.a.: Schott.
- Wolf, Hugo o.J. "*Gedichte von Goethe*", Leipzig: C.F.Peters.
- Zelter, Karl Friedrich (hrsg.v. Kubik u. Meier) 1995
"Carl Friedrich Zelter. Lieder", München: G.Henle Verlag (EDM106).
- Zumsteeg, Johann Rudolph 1800-05 (Nachdruck 1969) "*Kleien Balladen und Lieder*",
Leipzig: Breitkopf und Härtel (London, Gregg International Publishers).
- anonim 1822 'Anzeige' "*Wiener Zeitung*" 13.Dezember 1822, S.1148 (287.Heft S.4).
<http://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=wrz&datum=18221213&seite=4&zoom=33>

二次資料

- Barkhoff, Jürgen 2003 *Theatricality in Goethe's Wilhlm Meisters Lehrjahre*, in Byrne u. Farrelly, 2003 *Goethe and Schubert. Across the Divide*, Dublin: Carysfort Press, S.90-102.
- Blume, Friedrich 1958 Art. 'Klassik' in "MGG" 7, Sp.1027-1090.
- 1963 Art. 'Romantik' in "MGG" 11, Sp.785-845.
- Deutsch, Otto Erich (Hrsg.) 1957 *Schubert. Die Erinnerungen seiner Freunde*, Leipzig: Breitkopf & Härtel.
- (石井 不二雄訳 1978 『シューベルト 友人たちの回想』東京：白水社)
- Deutsch, Otto Erich (Hrsg.) 1964 *Schubert. Die Dokumente seines Lebens*, Kassel u.a.: Bärenreiter.
- Fischer-Dieskau, Dietrich 1971 *"Auf den Spuren der Schubert-Lieder"* Wiesbaden: Brockhaus.
- (原田 茂生訳 1976 『シューベルトの歌曲をたどって』東京：白水社)
- Hall, Michael 2003 *Schubert's Song Sets*, Burlington: Ashgate.
- Hilmar, Ernst (Hrsg.) 1993/2003 *Franz Schubert. Dokumente*, Tutzing: Hans Schneider.
- 堀 朋平 2014 「シューベルトと〈ロマン主義〉
- マイアホーファーとシラーの美学的交叉をめぐって」『音楽学』60(2), 12-141.
- 2016 『〈フランツ・シューベルト〉の誕生』東京：法政大学出版局.
- 村田 千尋 1997 『シューベルトのリート —創作と受容の諸相』東京：音楽之友社.
- 2004 『シューベルト』東京：音楽之友社.
- 2013 「シューベルトの悩み」『桐朋学園大学研究紀要』39, 37-54.
- 2018 「『ゲーテ歌曲集』のゆくえ」『東京音楽大学研究紀要』42, 25-47.
- 2019 「変奏有節歌曲の魅力 —シューベルトの工夫を探る」
- 『東京音楽大学研究紀要』43, 1-23.
- Salmen, Walter 1978 *Zur Semantik von Schuberts Harfenspielergesänge*
- "Schubert-Studien" 19, 141-149.
- 滝藤 早苗 2017 『ライヒャルト ゲーテ時代の指導的音楽家』東京：慶應義塾大学出版会.
- Urmoneit, Sebastian 1992 *Mignons 'Sehnsuchtslied' "Musik-Konzepte"* 75, 37-66.
- 著者不明 o.J. 'Bauernfeld, Eduard von' <https://www.deutsche-biographie.de/sfz2282.html>
- IMSLP (<https://imslp.org/wiki/IMSLP>)
- The LiederNet Archive (<http://www.lieder.net/>)
- インターネットの最終確認日 2021年8月31日